

言語能力を統合して解決する問題① 社会科

報告者 堀元公幹

1 問題作成の意図

社会科の問題は、大問①②の2題構成で、ともに記述式問題である。見取る言語能力として、「資料から情報を適切に読み取る力（読解力）」「情報を比較し読み取る力（創造的思考力）」「読み取った情報を基に自分の考えを表現する力（他者とのコミュニケーション）」の3種類を設定した。大問①は資料から情報を適切に読み取り理由を述べる問題、大問②は資料を比較しながら考えたことを根拠や理由を明確にして説明する問題である。大問①は読解力の側面及び他者とのコミュニケーションの側面、大問②は創造的思考の側面及び他者とのコミュニケーションの側面を見取れるようにした。

2 調査結果

表 1 読解力及び他者とのコミュニケーションを見る問題における正答率（%）（6月→11月）下段（R3年度6月→2月）

	3年間①	4年間①	5年間①	6年間①
紙／紙	45.2→33.9 (25.5→●47.1)	11.8→16.1 (58.8→58.8)	21.2→●63.6 (54.3→51.4)	34.3→●57.1 (67.6→○79.4)
ICT／紙	4.1→○24.0 (20.4→○38.8)	18.1→12.5 (28.6→○45.7)	18.2→●55.9 (58.8→○73.5)	55.9→52.9 (32.4→●61.8)
ICT／ICT		9.6→○27.5 (24.2→●45.5)	15.6→●42.9 (48.6→40.0)	54.3→57.1 (61.8→61.8)

表 2 創造的思考力及び他者とのコミュニケーションを見る問題における正答率（%）（6月→11月）下段（R3年度6月→2月）

	3年間②	4年間②	5年間②	6年間②
紙／紙	34.0→○50.0 (41.2→●52.9)	50.0→54.8 (38.2→44.1)	27.3→●48.5 (31.4→28.6)	51.7→●82.9 (29.4→38.2)
ICT／紙	4.1→●32.0 (22.4→●53.1)	42.4→50.0 (31.4→40.0)	42.4→35.3 (17.6→○44.1)	47.1→●88.2 (35.3→●55.9)
ICT／ICT		22.5→27.5 (18.2→●42.4)	28.1→○40.0 (2.9→○28.6)	60.0→○74.3 (32.4→○44.1)

※ゴシック体は、同項目最下位より10%以上高い値。6月より10%以上差異がある値は○か△、20%以上なら●か▲

3 考察①「提示／解答方法の『言語能力』への影響」

表1、表2のゴシック体部分に着目すると、紙媒体が読み取り・表出に関わる方が高い正答率を示す傾向がみられる。「3年間①」も、ゴシック体で示す数値ではないが、紙媒体が読み取り・表出に関わる方が高い正答率を示している。社会科の資料の読み取りでは、大事だと思ったところに鉛筆で線を引き着目点を強調したり、気付いたことを資料に直接書き込んだりすることが多い。その際に、紙の方が扱いやすかったのではないかと考えられる。つまり、資料から情報を読み取ったり、複数の資料を比較したりしながら解答する問題に対しては、ICT 機器よりも紙媒体に関わる方が高い正答率になる可能性がみられる。

表1、表2における ICT 機器に関わる解答方法（ICT／ICT）に着目すると、問①問②どちらにおいても、学年が上がるにつれて正答率が高くなっている。また、どの学年においても6月実施の正答率と比較すると、11月実施の正答率の方が高くなっている。3つの解答方法において、全ての問題で6月に比べて11月の正答率が高くなっているのは、ICT／ICTのみである。本校では、昨年度より一人一台端末が導入され、年間を通して社会科だけではなく様々な教科において ICT 機器を活用している。社会科においては、単元末のパフォーマンスとして、「意見文」や「提案文」を書くだけでなく、タブレット端末を用いてまとめる活動も行っている。ICT を活用する機会が増え、タイピング等の技能が上達したことで、正答率も高まったのではないかと考える。特に、「4年間①」では紙／紙及び ICT／紙よりも10%以上正答率が高く、6月に比べても10%以上高くなっている。これは、総合的な学習の時間において、調べたことをまとめる時期と重なっており、特に ICT 機器を使用する頻度が高くなっていたことも関係しているのではないかと考えられる。

4 考察②「アカデミック・ライティングで指導可能な言語能力の変化」

「読解力の側面」及び「他者とのコミュニケーションの側面」について、R4年の6月と11月の正答率の変容から考察する。高学年において変化が大きく、「6年間①」の ICT／紙でわずかに減少(55.9→52.9)しているが、その他の問題では解答方法に関わらずどの学年でも増加していた。特に、「5年間①」に着目すると、全ての解答方法において20%以上の増加を示している。R4年の第5学年の児童は、R3年の第4学年の社会科学習から、資料を多面的・多角的に捉え、多様な情報を読み取る学習活動を積み重ねている。また、討論や意見交流などを通して、理由付けながら自分たちの考えを述べ合い、最終的な意思決定をする活動や、学習してきたことを新聞やポスターなどにまとめ、自分たちの考えを発信する活動も行っている。このような活動を繰り返してきたことが、成果を上げた一因だと考える。

「創造的思考力の側面」及び「他者とのコミュニケーションの側面」について、R4年の6月と11月の正答率の変容から考察する。「5年間②」の ICT／紙のみ減少(42.4→35.3)しているが、その他の問題については、解答方法に関わらずどの学年においても増加する結果となった。高学年での変化が大きいことから、読解力の向上と創造的思考力の向上との関係性も考えられる。特に、「6年間②」に着目すると、紙／紙及び ICT／紙で20%以上、ICT／ICTで10%以上の増加を示している。R4年の第6学年児童は、複数の資料を比較したり関連付けたりしながら情報を読み取り、根拠を示しながら考えを交流し合う活動を積み重ねてきている。また、単元の終末には学習してきたことをもとに、関係機関の専門家に自分の考えを提案する活動も行っている。提案の中には、資料を用いて根拠となる数値を示すことで、説得力をもたせるようにしてきた。このような取り組みも成果の一因であると考えられる。